

新刊紹介

十川陽一著

『天皇側近たちの奈良時代』

浦西直也

本書は、「側近」という視点から日本古代史を検討した、吉川弘文館「歴史文化ライブラリー」の一冊である。以下に各章とその概要を挙げる。

「側近とは何者か―プロフィール―」では、天皇に近侍した人々の役割について検討する。そして、「側近」を個別の政変・政局との関係を越えて、奈良時代の国家の中に位置づけることを目的として掲げ、日本古代史における「側近」像とその役割の検討という本書のテーマを提示する。まず「日本古代史における側近の可能性」では、平安時代初期の政局とそこにおける側近を検討し、側近が天皇や院の家政と結びついていたことを導き出す。

著者はその淵源を奈良時代に求め、当時の側近像を律令官制との関わりに基づいて言及する。

次に「側近のてがかり 天皇周辺の事業から」では、都造りを取り上げ、それに従事した豪族について検討する。古代において、都造りなどの大事業を動かすことは天皇によってなされたが、その運用には官人が任用されており、それは天皇・皇后との関係に基づくものであったことを論じる。

続く「側近の具体像・内臣」では、律令には規定が無いにも関わらず天皇に近侍し、天皇家産の管理を行っていたと考えられる内臣に注目し、そこから見える側近像を明らかにする。まず、藤原鎌足・房前が他の職とは別に内臣となっていたことを指摘し、内臣が律令官制の体系とは別に存在した特殊な側近であった可能性を示唆する。また、内臣房前や紫微内相藤原仲麻呂が皇后光明子及び天皇

の家産管理に関わっていたことから、側近は奈良時代には令制の官僚機構を経由せずに家産を動かし、国家的事業をおこなうことができる存在であったと位置づける。

「側近の諸相」では、側近について主に称徳朝を中心に述べられる。天皇家産の管理を行うためには、天皇・皇后と親密な関係性を築く必要があり、その関係性を築くことで令制官僚機構の一員となることから、天皇家産と律令官制との連動性を説く。また官人である馬国人の生涯を通して、天皇・皇后との関係性が昇進に大きく影響していたことを明らかにしている。

「内臣の変質と新しい側近の姿」では、主に光仁朝以降の側近について述べられている。光仁朝になると、それまで政治機構と内臣とが分離していた状態に変化が起り、内臣が政治を主導していく立場となった。しかしその一方では、内臣

とは別に天皇家産に関わっていた藤原百川らがあり、その人々が内臣にはついていないことから、著者は彼らを「内臣ではない」「内臣」と区分している。また

本章では、平安時代への展開についても触れ、内臣が内大臣へと派生し、太政官に組み込まれていく一方で、新たな天皇家産機構として蔵人所が成立したことから、これまでの側近が天皇の家産管理から外れ、より政治の中心に位置するようになっていったことを論じている。

「側近からみた日本の古代国家―エピソード―」では、各章の検討を通じて、「側近」を令制の官僚機構とは別に天皇家産に関わった官人として位置づける。しかし、その側近も最終的には官人秩序の中に組み込まれていたことから、古代日本においては天皇家産と律令制とが一体のものとして動いていたことを指摘する。また、外戚と側近についても触れ、外戚を側近になる要件の一つとしながら

も、ミウチ的結合を重視する外戚とは異なり、「側近」は天皇や院との個人的関係性が根本にあったとする。以上のことから、「側近」となることは氏族にとつて、重要なアイデンティティとなつていたことを示して全体を括っている。

本書は、これまで日本古代史研究の中であまり取り上げられることのなかった「側近」という概念を取り入れ、その位置づけや具体像を明確にした点で、古代官人制に関する従来の研究に一石を投じた一冊といえる。そしてその「側近」が奈良時代から平安時代にかけて変容し、官僚機構に組み込まれていく様子を詳細に検討し論じている。その一方で、ただ外戚として権威を確立した者を側近とするのではなく、天皇の家産機構を運営し、天皇に近侍していた人物を「側近」として評価している点も本書の特徴である。

これらの点から、古代史を学ぶ上で必読の書といえよう。是非ご一読をお勧めしたい。

たい。

(吉川弘文館 二〇一七年五月 B6版)

一九二頁 本体価格一七〇〇円)

天理大学考古学・民俗学研究室(編)

『モノと図像から探る妖怪・

怪獣の誕生』

高岡優実

本書は、モノと図像から妖怪や怪獣をみていく天理大学考古学・民俗学シリーズ三分冊の第二冊目である。タイトルにあるように、特に妖怪・怪獣の誕生に関する論稿がまとめられている。それらの中から今回は四つの論文を紹介したい。

まず、「一つ目小僧の系譜」(飯島吉晴)はポピュラーな妖怪である一つ目小僧について、主に柳田国男の議論に依拠しながら検討を加えている。筆者は柳田国男の「一つ目小僧論」を踏まえ、この

妖怪が片目である点に着目し、考古学や

されている。

古代文字学の研究成果にも触れつつ、目の役割を検討している。また鍛冶師の片目伝承にも注目し、世界各地の神話にみられる鍛冶師の単眼あるいは片足の伝承について取り上げ、今村仁司の「第三項排除論」との関連から考察している。筆者によれば、一つ目小僧の問題は古い宗教儀礼に残る供儀のメカニズムの反映であっただけでなく、近代貨幣経済成立の本質をなしているという。その原理となるのは、「共同体全員がところを一つにしてただ一人を排除すること」であり、それが「ケガレ」の存在と空間を生み出した点を、筆者は指摘している。

次に、「正倉院に人面鳥がいる」（山本忠尚）では、図録にて「迦陵頻伽」と表記された、正倉院宝物の「人面鳥」が取り上げられ、その系譜について、中国をはじめとした諸国の「人面鳥」と、正倉院の「人面鳥」とを比較しながら考察が

正倉院の人面鳥によく似た造形は、中国では盛唐から中唐にかけて盛んに用いられたが、本稿はそれ以前の事例をいくつか挙げて、人面鳥の源泉を探索している。中国で迦陵頻伽が初めて描かれたのは初唐の敦煌莫高窟であるが、筆者はその下地を求め、インド神話や仏教説話に登場するガンダルヴァ、ソグドの人面鳥、東漢に出現した千秋万歳について検討する。いずれも共通する部分はみられたが、例えばソグドの人面鳥は故地では人面鳥ではなく鳥身でもないなど、明確な相違点が見られるため、迦陵頻伽とは異なる系譜であると筆者は論じている。つまり初唐期に登場した迦陵頻伽はいずれの人面鳥の系譜にも属さない、変相図に登場した迦陵頻伽をモチーフにしたものであり、正倉院の「人面鳥」もそれと姿態が共通していることから、迦陵頻伽の流れを汲んだものであると結論づけている。

続いて「龍・鳳凰・鬼・怪獣を纏った大刀」（橋本英将）は、裝飾大刀についての論考である。日本では、実用に適さないほどの裝飾を施した裝飾大刀が各地の古墳から発見されている。同様の裝飾大刀は朝鮮半島や中国でも発見されており、またよく似た大刀のデザインは北方ユーラシアでもみつかっている。この点に関して筆者は、朝鮮半島と日本との共通点・相違点をもとに、北方アジアにおける裝飾大刀の特徴を抽出し、それらが北方アジア独特のものであるのか、それともユーラシアとの関連を持つのかについて、ササン朝ペルシアの裝飾剣を比較対象にして検討を行った。

日本の裝飾大刀は、朝鮮半島の流れを汲んでおり、鳳凰や龍などの怪獣を纏った大刀と、三葉文など植物をあしらった大刀の二系統が存在している。このデザインの背景を探索するために、筆者はイランの裝飾剣の技法と文様について分析し、

ギルシュマンや白木原一、穴沢和光、馬目順一らの考察を参照しつつ、イランの装飾剣が持つ猛禽の羽状文と植物文からそこに「怪獣」と「植物」の併存を指摘する。東アジアとは発現が異なるイランの事例には、その背景に、世界樹と至高神の象徴としての「鷲」の観念がある。

イランは北方ユーラシアを包括する共通の文化複合体の中にあり、そのため共通する文化現象が見られたのだらう。解釈の後追いの感はあるが、これまでの研究が手際よくまとめられた論文である。

最後に「怪獣」の足跡―怪しい獣から怪獣へ（齊藤純）では、「怪獣」という単語の意味の変遷から、現代の「怪獣」像がどのように形成されたのかが考察されている。天明二年の「奥州会津怪獣絵図」では、怪獣は動物妖怪の総称である。そもそも怪獣は妖怪と同様に想像の産物であり、人間世界と対立するように設定された超自然的存在であった。

それに近代以降、世界に関する情報の増加により、密林や孤島といった辺境の生物、また恐竜やその他の有史以前の化石動物等の要素が加わった。さらに怪獣は『ロスト・ワールド』や『キング・コング』などの冒険小説やスペクタクル映画をへて、現代文明への対抗者としての立場を鮮明にしていき、それに見合った姿・能力が要求されるようになったことが、本稿では指摘されている。そのうえで筆者は、妖怪の属性が文明的・科学的に鍛えなおされたものが現在の「怪獣」であるとまとめている。

本シリーズは、民俗学と考古学の研究者による妖怪・怪獣についての著作である。本書以外の各巻では、世界の妖怪・怪獣の検討や東西比較が行われている。シリーズの二冊目にあたる本書は、妖怪や怪獣を生み出した人間の想像力を明らかにしようとしたものである。本書には四本の論文以外にも関連するコラム

が掲載されており、妖怪や怪獣への様々な視点に触れることができる。一読してみてはいかがだろうか。

（勉誠出版 二〇一六年三月 A5版

一八八頁 本体価格一六〇〇円）

小林恭子著

『英国公文書の世界史 一次資料の宝石箱』

水田大紀

近世期以降のイギリスにおいて、夏のロンドンには上流階級の人々にとつての「社交場」であった。普段は田舎に住まう彼らも、この時期には都市に赴いて奢侈的な消費を行うとともに、必要な情報を集めたり旧交を温めたりすることで、階級的な一体性の維持に努めた。これが、いわゆる「社交季節（シーズン）」である。翻つて現在、夏のロndonはイギリ

ス史研究者にとっても「シーズン」となっている。長期休暇期間となる八月九月には、世界中から研究者たちがロンドンに集い、自身の研究の史資料を探すとともに、研究者同士で必要な情報を交換したり議論を深めたりすることで、研究の新たな可能性を模索している。その際、英国図書館 (British Library) と並んで研究者が出会う場所となっているのが、本書の題材でもあるイギリスの国立公文書館 (National Archive) である。

同館には、世界的にみても非常に貴重な史資料が数多所蔵されており、本書では、そういった史資料の中から読者が特に興味を持ってそうな史料二八点が取り上げられている。例えば、イギリス最古の公文書である一一世紀の土地台帳、高校世界史の教科書では必掲の「大憲章 (マグナ・カルタ) (一二三世紀)、一七世紀に書かれたシェイクスピアの遺言状、ロンドン警視庁に宛てた「切り裂きジャック

ク」からの手紙や夏目漱石の下宿の記録 (一九世紀)、タイタニック号からの SOS、第二次世界大戦期や冷戦期のスパイ関連文書、ビートルズの来日報告書 (二〇世紀) などである。これらの史料が、読者の関心をさらに喚起すべく、それぞれにまつわるエピソードと絡めて紹介されている。さらにそれらの史資料は、かつてイギリスが世界帝国であったことから、イギリス国内史のみならず、世界史の重要な転換点を示す証拠ともなっているのである。この意味で本書は、タイトルにもあるように、公文書が示す「世界史」として、歴史を学ぶ上で、手に取りやすい案内書になっている。

その一方で本書のもうひとつの目的は、日本の公文書館の在り方を考えることにある。この点について筆者は、イギリスで国立公文書館が創設された経緯とともに、第六章の「英国と日本の公文書館、これまでとこれから」で自身の意見を述

べている。そのなかで筆者は、「日本でも国立公文書館がより大きく発展することを期待」(本書二六七頁)する一方、それがイギリスの公文書館と異なり、多くの人が利用できない閉鎖的な施設になるのではないかと危惧する。つまり、二〇一七年に起こった公文書管理をめぐる問題 (例えば、南スーダン派遣時の自衛隊の日報問題、財務省や官邸における「モリ・カケ」疑惑など) からみても、国立公文書館の在り方は現代日本社会にとって熟考するに足るテーマなのである。本書で筆者が指摘しているように、その際、様々な欠点はあるにせよ、イギリスにおける国立公文書館の在り方は、今後の日本社会における公文書の扱い方や公文書館の位置づけを考えていくうえで、参照すべき重要な先例のひとつになりうるであろう。

むろん、イギリスにある重要な文書館は英国図書館や国立公文書館だけではなく

い。ロンドンだけでも、各大学図書館やメトロポリタンアーカイヴ（London

Metropolitan Archive）⁷ 郵便博物館資

料室（旧逋信省文書館）（Postal Museum,

former Postal Mail Archive）⁸ 議会文

書館（Parliamentary Archives, House

of Lords and Commons Libraries）な

ど、多くの図書館・文書館が国立公文書

館と同じく、『公文書はみんなのもの』

『公文書館の役割は書類の発見・閲覧を

支援すること』という原則」（本書二六

八頁）に基づき、世界各国から集う人々

に対し、史資料の検索・閲覧サーヴィス

を基本的に無料で提供している。予算の

削減などから、近年では徐々にその役務

を縮小・制限しつつある図書館・文書館

も残念ながら散見されるものの、イギリ

スにおいて、少なくとも今しばらくはこ

れらの活動原則に大きな変更はないよう

である。その「矜持」ともいうべきもの

にこそ、本書の「（イギリスで）なぜ、

記録が残され保管されてきたか」という疑問を解く鍵が隠されているのである。

（中央公論新社（中公新書ラクレ六一三）

二〇一八年三月 新書版

二八四頁 本体価格八八〇円）